

第四十四回 ASSOCIATION FOR MORAL EDUCATION

に参加して

名古屋市立大学大学院人間文化研究所 山田 美香

一・学会に参加して

今回、平成三〇年一月八日から十日まで道徳教育学会がスペイン・バロセロナにおいて行われたため、多様な国の関係者が道徳教育のどこに関心を持っているのかを知るために参加した。これまで私の研究は日本・中国・台湾・香港の道徳教育を論じるものであったが、欧米と日本では学校教育で道徳教育を行う意義も異なることから、その違いを明確にしたうえで、改めて道徳教育を論じたいという気持ちがあった。

オープニング・セレモニーは、バロセロナ大学の旧校舎で行われた。歴史的な建造物における講演を聞いたが、世界で必要とされている道徳教育・方法論をまとめたもので大変分かりやすかった。その後、バロセロナ大学の新校舎において、キーノート、各分科会、ポスター発表な

どがあった。新校舎はバロセロナの街から離れた場所にあるが、地下鉄の近くに大学があり、またそのすぐ近くのホテルの一部も大学が使用していた。今回は、そのホテルを学会の会場として使用した。バロセロナにおける民族と政治に関わる議論は、道徳教育においても大変重要なテーマであるが、今回バロセロナが会場であっても、「民族と道徳教育」というテーマはほとんどなかった。

二・日本と周辺国の愛国心教育

今回の学会では、「The moral education in post-war Asia (Japan, China, and Taiwan)」というテーマのポスター発表を行った。「道徳教育と愛国心教育との関係」の議論を重ねざるを得ないのは、日本や周辺国の独特の歴史が関係している。日本や周辺国は愛国心教育の

あり方如何によって、その政治情勢が大きく変わる。同時に、日本では広く愛国心教育を議論することができない環境もある。それは、日本において自分の国を愛する愛国心教育を行うことは当たり前だと理解される一方で、周辺国から日本の愛国心教育に対して絶えず意見される現状もあるためである。そうはいっても周辺国のほとんどが、道徳教育のなかに愛国心教育を含める教育を行っている。道徳教育と愛国心教育を議論すること自体、その概念こそがアジア独特の概念である。

ところで、ポスター発表のテーマは「日本・中国・台湾」の道徳教育と愛国心教育であったが、一人の研究者からは、「台湾は中国の一部であり、独立して台湾の道徳教育を考えるのはどうか、タイトルも『China Taiwan』と書くべきではないか」というような意見をもらった。他にも愛国主義に関する議論をしようとすると、「どこの国でも愛国主義教育は行っているでしょ」と、愛国主義そのものの議論の必要性を感じないという研究者もいた。また、自分の身内が他国に殺された海外の研究者も、日本と中国・韓国では戦前の日本統治についての議論が行われているが、既に戦後七十年以上も経ったにも拘らず、過去を持ち出す必要

があるのか、と述べた。

日本・中国・韓国において行われている議論と世界の愛国心教育に関わる議論は重なる部分はあるが、しかし、世界において日本・中国・韓国の議論が普遍性を持たない理由をどのように考えたらよいのであろうか。

私は、日本や周辺国の愛国主義教育の議論は戦後七〇年以上の歴史があつてこそ成り立つもので、それを単純に「道徳教育と愛国主義教育」との関係性として考えることは一面的であると考ええる。また、人の気持ちとして自分の国を愛することは当然であり、日本や中国などの愛国主義教育の議論が、一歩進んで世界における平和主義につながるものであれば関心を持ってもらえたのかもしれない。戦前から戦後の「政治と愛国主義教育」の問題はこの国でも共通する課題であり、新たな視点がないと普遍性を持ってない。

三・日本の道徳教育

世界的にみて日本の道徳教育はアジアの一国の道徳教育にすぎない。しかし一国の道徳教育であつても、何を目指して道徳教育を行っているのか、そこに子どものどのような成長を見たいのか、その点について関

心を持つ者は多い。現在日本の道徳教育は「学校の教育活動全体を通じて行う」とされる。日本は学習指導要領によつて今年度から小学校は教科書によつて教育をしている。文科省が組織的に道徳教育を行っているが、行政が道徳教育を強化することに拘らず、日本では人間が生きていくうえで「道徳」が重要であるという認識が今なお強い。これまでの学校における実践の成果はともかく、戦前から戦後まで継続して道徳教育の重要性が言われ続けたのは事実である。

ところが、参加した道徳教育学会において多くの報告を聞いたが、日本の学会では定番の授業実践報告もなく、道徳教育学会とは無縁と考えられる社会科学の理論や実践報告が多かった。正直なところを言えば、これが「moral education」に関する学会であるのか、教育社会学会に近いのではないか、という感想を持った。例えば、地域で子どもが成長していくための多様な機関の連携に関する報告を聞いた。機関の連携が子どもの成長にプラスになるのであれば、その連携のプロセスと子どもの成長、そこにどのような指導が必要とされるのが日本における道徳教育のテーマである。しかし、その報告に子どもの成長に関わる部分は全

くなく、あくまで教師や関係者がどのように連携すべきかという内容であった。日本の道徳教育学会では、なかなか扱うことができないテーマと言える。

それは、この道徳教育学会が、道徳教育より「civic education」「市民性教育」「キャラクター教育」が中心的テーマであることが理由である。日本でも戦後初期この概念が導入されたが、その後、昭和三三年道徳の時間が特設されたことから、道徳教育は学習指導要領における内容項目に関連したものを学ぶことになった。当然、子どもに必要な視点で道徳教育が行われるとはいえず、現在でも徳目主義は重視されている。現在の日本の道徳教育は、「civic education」「市民性教育」「キャラクター教育」と重なる部分もあるが、徳目主義といった方がその性格を示しているといえる。学習指導要領において日本の道徳教育は、「A 主として自分自身に関すること」「B 主として人との関わりに関すること」「C 主として集団や社会との関わりに関すること」「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」のCにおいて「国際理解、国際貢献」について学ぶことが明確に示されている。現在は、その内容項目に対応する教科書があ

り、それをもとに他の教材とともに学んでいく。しかし、定められた内容項目があつて教科書で順に項目を学んでいくことでは、子ども自身が少しずつ自分の社会を広げていくプロセスを見い出すことはできない。日本では子どもが自分自身で学んでいくプロセスを大事にする教育状況になく、教科書に書かれている「自分自身」から「国際理解、国際貢献」への広がりを見出すことになつていく。その点が「civic education」「市民性教育」「キャラクター教育」と日本の道徳教育との根本的な違いに見える。

四・道徳教育学会の意義

今回、国際学会によって、「国際的に道徳教育を見る視点」というのが何を意味するのかを考えるきっかけを得た。それは、その研究者の出身地域の状況が色濃く反映された報告が多かつたことによる。世界の子どもが「国際理解、国際貢献」を学ぶとき、その「国際理解、国際貢献」は同じような一つの「国際社会」をもとに考えているとはとても思えない。例えば、あるアジアの研究者は、国際社会で一般に正しいと認められた価値観をもとに、そこにもとづいた「国際理解、国際貢献」に関わる

実践を行うことが重要であるという報告を行つた。そのメッセージ性は大変強いものの、この報告に対して、正直なところ、私は個性がない報告だという感想を持った。一つの価値観のみで「国際社会」を捉えることができるのか、「国際社会」というのはそのような単一的なものなのだろうか。

例えば、国際平和・環境問題は「国際社会」を議論する際によく取り上げられるものである。しかし、そこにおける「国際社会」は、それぞれの国・地域の状況によつて、「国際社会」も大きく変化して見えるであろう。今回の学会報告の多くは、しかし、国際社会が進むべき方向は最初から決まつており、例えば環境問題であれば、現場の困難を取り上げるより、「あるべき論」を展開する報告が多かつた。それは、まだそのような「あるべき論」が必要な時代であり、「あるべき論」の存在がなければ世界は変わらないという意識もあり、歓迎されたからである。

五・おわりに

今回の学会は、教育に関わるテーマを報告した者が多く、子どもの道徳的発達、道徳教育のあり方に関わる議論は少なかつた。このことにつ

いて他の日本人参加者に聞くと、心理学をベースにした学会であるのでその傾向が強いこと、しかし心理学以外に社会的な要素も強いということと言つた。道徳教育が必要とする要素が日本と他の国では異なり、日本の道徳教育の考え方では道徳教育の報告とは見なさない報告がかなり多かつた。それが、逆に自分にとって客観的に道徳教育を顧みる機会になつた。つまり日本や周辺国で行われている道徳教育は世界におけるごく一部の道徳教育であり、世界で行われている道徳教育のあり方を知らない、「道徳の教科化」など新しい試みを行つた日本の状況が国際的に評価されないことを改めて認識した。